

講演Ⅰ

「パーキンソン病のリハビリ処方」

滋賀県立成人病センターリハビリテーション科部長 中馬 孝容



パーキンソン病は徐々に重症度が増していくが、さらに加齢の影響も加わってくる。症状は運動症状だけではなく、非運動症状もあり多岐にわたる。個々の状況に応じてリハビリテーション処方を行い、自主訓練指導を行うことが重要である。最近では、Cueを利用した外発性随意運動を取り入れた訓練が効果的であるとの報告が多く、歩行障害や姿勢反射障害を伴っている患者に対し試みる価値は高い。今回、パーキンソン病のリハビリ処方のポイントについて述べたいと思う。

【略歴】

平成2年：奈良県立医科大学卒業
同大学神経内科入局
平成3年 奈良県リハビリテーションセンター勤務
平成5年 奈良県立医科大学神経内科医員
平成8年 北海道大学医学部リハビリテーション医学助手
平成15年 北海道大学病院リハビリテーション科助手
平成20年 滋賀県立成人病センターリハビリテーション科副部長
平成21年 滋賀県立成人病センターリハビリテーション科部長

【学会活動】

日本リハビリテーション医学会試験委員会委員長（平成24年4月～）
日本リハビリテーション医学会リハビリテーション科女性専門医ネットワーク委員会委員（平成21年7月～）
日本リハビリテーション医学会専門医 日本神経学会専門医 日本臨床神経生理学会認定医
評議員：日本リハビリテーション医学会、日本神経治療学会、バイオメカニズム学会、日本身体障害者補助犬学会

講演Ⅱ

「エビデンスを活用したリハビリの実際」

文京学院大学保健医療技術学部 望月 久



いくつかのガイドラインやシステマティックレビューからみるかぎり、パーキンソン病に対するリハビリの有効性に関するエビデンスはかなり高く、薬物療法と併用して理学療法や作業療法を実施することが強く勧められています。パーキンソン病のリハビリとしては、主に生活における活動性の維持・向上に加えて、疾患の特徴を踏まえた理学療法や作業療法が実施されています。また、パーキンソン病は進行性疾患であることから、進行を考慮したリハビリ内容の変更が不可欠です。講演では、パーキンソン病に対するリハビリのエビデンスを提示しつつ、進行にそったリハビリの内容、パーキンソン病の障害特性を考慮した理学療法について紹介します。

【略歴】

昭和57年3月：東京都立府中リハビリテーション専門学校理学療法学科卒業
昭和57年4月：東京都衛生局入都（都立神経病院リハビリテーション科）
以後、都立府中病院、都立荏原病院、都立大塚病院、都立墨東病院勤務
平成19年3月：東京都退職
平成19年4月：文京学院大学保健技術学部理学療法学科 教授

専門分野：神経系疾患の理学療法、姿勢調節（バランス機能）

